

テーブルにもたれて宿題の算術をおいて居ると、玄関の戸ががらりとあいた。おや誰だらうとみると父は一人のお客を連れてのこくと臺所の方へ来た。私の胸ははつとした。又何時もの様におこられるだらうと思へば、一分間でも父の傍にはゐられないやうな気がして大急ぎで道具を片付けて奥へ行つた。

いつも提灯をつけてとる床も、今晚だけは暗がりを手探りで敷いた。何事もなくてくれ、ばよいと心に祈りながら、小さく縮まつて寝た。二分三分五分と次第に時間は過ぎた、十分位もたつた頃「とみ——とみ——」と父の叫ぶ聲に、胸がどきどきして返事もしないで、むつくり床の上に座つた。「とみ寝てゐた者でも起きて仕事してゐるのにお前どうして寝た。早く起きて切り鳥賊せ」といつた。「はい」と云ひながら大急ぎで前掛をあて、臺所へ来た。父は蜜柑箱の少し大きいのに鳥賊を一杯(澤山)買つて来たのであつた。客は歸つて母と姉が、鳥賊の腹などを取つて拵へてゐた。私はまだ一度も拵らいた事がないので、どこからどうして切るのだから分らない。それでも、板の前に座つた。私に當つた包丁は一番切れないので、ぎゆうくと曲る。母は「そんな手附で切れるもんか、井戸へ行つて水汲んで来い」といつた。

私は井戸へ行つてつるべを上げながらも、自分の悲しい身の上が思はれて涙が出た。水を汲んで来た時、父は鳥賊の刺身で御飯を食べてゐた。「とみ、飯盛れ」と私に茶碗を出した。私は御飯を盛つて父の手を出してゐるのに気が付かず、御膳の上に置いた。父は怒つて「なぜ手を出してゐるのに此處へ置いた」といふ。私は何も氣附かずに置いたのだから、何とも答へようがなくて黙つてゐた。父は「耳ないのか」と爐の火箸を掴んだ。私は胸が一つば

いで何もいはれない、漸と「氣が附かなかつたから許して下さい」と之だけいつた。氣が附かずにした事を、こんなにははれるとは情無い。何時もかうして少しの事で叱られる。雪降に家の前の雪の中へ裸で投げ込まれた事、妹の事で學校の方まで追はれてたゞかれた事、色々の事が思ひ出されてひとりで涙が出る。臺所の隅に行つて涙をそつとぬぐひました。父の叱るのを母(繼母)は止めてもくれず「あんまり意氣地が無いだもの、よその子供ならちやか／＼(さつさ)と働くのに」といふ。私は其所にはゐられない様な穴でもあつたら入りたいたい様な氣がした。黙つて隅の方に立つてゐると父は「どうして其所に立つてゐるんだ。

仕事すれと起したのに仕事も仕ないで生狡れ奴だ」といつた。私は涙をためながら俎板の前に座つて、なれない仕事をしてゐた。姉や母を見るとすつ／＼と上手に拵えてゐる。私ばかりはどうしてかうだろうと思ひながら、一生懸命に拵へた。みんな拵へた時は十時頃でした。三つの時別れた母は去年死にました。どうして可愛い子供を五人もおいて、他家へ行つたのでせう、それには何か深いわけがあるでせう。それでも母の死顔でも見たかつた。三つの時別れてから七つの時、一度逢つた事があります。其時母は私の手を取つて「私はお前の親でもない、子でもない」とまでいつたのですもの、色々の事を思つてゐるとからだがふら／＼するようでした。氣が附くと自分は部屋の入口へ黙つて立つてゐるのです。寒さに氣が附いて床にもぐると実母の顔が目の前に見える様で、涙が尚も出るのです。いつでもかうして叱られるのを思へば、友達が羨ましくなりません。一度だつてやさしい言葉で物をゐわれた事は無い。友達はいつともやさしい言葉で父母から愛されてゐるだろうが、私は父母の眞のやさしい言葉を聞いた事がない。中でも父の方は頑固であるから、兄も弟妹も皆怖がつてゐる。私はなるたけひねくれまいと思つてゐるけれども、かういう家庭に育つた私は、自然にひねくれるのです。私はいつも寢床へ入れれば泣くのです。心で泣いてゐるのです、心で泣けば自然に涙が出るのです。かう云う時には床の中へもぐり込んで泣くのです。